特集

9月15日、という日

～大野木場小校舎焼失から20年～

9月15日、深江町大野木場小学校で、普賢岳災害の「メモリアルデー2011」が行われ、旧大野木場小学校が焼失した日から20年目の節目の日を、地域住民や児童らで迎えました。

セレモニーでは、5年生による火山学習の発表が行われたほか、小グループに分かれ、当時の校長先生らの被災体験に耳を傾けました。

その後、これまで歌い継がれてきた「生きていたんだね」を全校児童で斉唱。

この歌は、長崎県出身の音楽家、寺井一通さんの作詞、作曲によるもので、一時は火砕流で枯れたと思われていた校舎のイチョウの木が、翌年葉をつけたことをモチーフに作られた曲です。

雲仙普賢岳噴火災害から20年。20年前のこの日、一体何が起こったのかを特集します。

生きていたんだね

～校庭のいちょうの木に寄せて～

詩・曲／寺井一通

校庭のすみの
いちょうの木が
ながい冬を
しっかりたえて
はるのひざしあびて
あたらしい芽をつけた

生きていたんだね
おまえのように
ぼくたちも　わたしたちも
まえをむいて　あるいてゆきたい

あの日うもれたみどりの山に
すがたをけした小鳥のこえが
はるのかぜにのって
このまちにもきこえてきた

生きていたんだね
おまえのように
ぼくたちも　わたしたちも
まえをむいて　あるいてゆきたい

全校児童で、「生きていたんだね」を歌う児童ら。力強く、美しい調べが、体育館中に響きわたりました。

雲仙普賢岳の噴火と災害

平成2年	
7月	普賢岳の直下でM3.9の地震
11月17日	雲仙普賢岳が、198年ぶりに噴火
平成3年	
5月15日	水無川に初めて土石流発生
5月20日	初めての溶岩ドーム出現
5月23日	溶岩ドームの一部が崩落し始める
5月24日	初めての火砕流発生
5月26日	初めて負傷者が出る（1人）
5月29日	人家まで200メートルとなる火砕流が発生。山火事も発生
6月3日	午後4時8分　大火砕流発生 死者40人、行方不明者3人、負傷者9人、建物被害179棟
6月8日	大火砕流発生（午後7時51分）
6月30日	水無川など3河川で土石流発生。202棟の建物被害
9月15日	大火砕流発生（午後6時54分） 大野木場小学校が消失。218棟の建物被害
以降も土石流、火砕流は発生するものの、住家・人的被害はなし	
平成5年	
4月28日	6月18日までの土石流で、768棟の建物被害が発生
6月18日	水無川、中尾川で土石流が発生。安中三角地帯は、壊滅状態
6月23日	火砕流発生。死者1人、家屋焼失
平成7年	
3月30日	九州大学太田一也教授が噴火活動の停止を表明。
5月25日	火山噴火予知連絡会が「マグマの供給と噴火活動はほぼ停止状態にある」という統一見解を発表。
平成8年	
5月1日	最後の火災流発生
5月20日	溶岩ドームを「平成新山」と命名
6月3日	噴火活動の終息宣言

「雲仙・普賢岳噴火災害復興10年のあゆみ」より抜粋

南島原市・島原市の雲仙普賢岳災害の概要

- 死　亡……44人
- けがをした人…12人
- 壊れた家…1,399戸
  （家以外の建物被害…1,112戸）
- 国道57号線が通れなかった日…817日
- 国道251号線が通れなかった日…196日
- 島原鉄道が動かなかった日……1,698日

9月15日という日

当時の記録によると、その日の朝、平成3年9月15日は、晴れていたという。

だが、午後4時44分、事態は一変する。

普賢岳北東斜面で大火砕流が発生。火山灰で、町じゅうが深い闇に包まれた。

災害対策本部では、防災無線などで住民に退去を呼び掛けた。さらに6時54分には、当時最大規模となる火砕流が発生。大野木場小学校を中心とした住家などを焼きつくした。

当時の広報紙によると、この日、34世帯、161人、153棟（うち住家34棟）が被災した、と書かれている。（このほか、郵便局なども入れると156棟）。

9月15日に発生した火砕流

焼けた学校の校庭には、あのイチョウもあった。

少し時間は戻る。「大野木場の方が火事のようだ」深江町役場の中川総務課長から、当時の深江町消防団長の石川嘉則さんに連絡があったのは、午後7時のことだ。普通、夜の山火事ならずいぶん遠くから見える。だが、この日は、火砕流が視界を閉ざし、雲仙どころか、数百メートル先さえ見えなかった。

電話を切った石川団長は、一人で警戒区域に向かった。

「ひどい・・」――　真っ暗な中に住宅が、学校が、体育館が、これほど燃えるものかというほどに炎を吹いていた。

言葉を失う石川団長に、呼び掛ける声がした。顔見知りの消防団員。家の様子が心配でいてもたってもいられなかったらしかった。

「分団の消防車を出していいですか？私の家に燃え移りそうなんです」

涙ながらに訴える彼に、石川団長は首を振った。

「すまないが、それは、できないんだ」

今なら間に合う、間に合うんです、と泣きすがる彼の肩を抱き、2人泣いた。

その2週間後、傷ついた深江町をさらに震撼させる出来事が発生する。台風19号襲来。多くの被害、中でも大停電による深い闇は、かつてないほどに住民を追いつめた。

そんな折、さらに新たな問題が持ち上がる。

大野木場地区のある第8分団から「家が焼けたのに、消防団なんかできない」という声が上がったのだ。当時の大山秀孝8分団長（現在の深江地区団長）や石川団長らの再三の説得にもかかわらず、事態は好転しない。日に日に解散の声は高くなっていった。

そんなある日の会合でのことだ。

一人の団員が声を上げた。

←次のページに続く